

平成21年 5 月 5 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520467

研究課題名（和文） 体験型言語・文化学習の評価に関する研究

研究課題名（英文） A study on evaluation of experiential learning in language and culture

研究代表者

八島 智子（YASHIMA TOMOKO）

関西大学・外国語教育研究機構・教授

研究者番号：60210233

研究成果の概要：

本研究においては、1）大学生の短期国際ボランティア・プロジェクト、2）大学生の短期語学研修、3）高校における模擬国連プロジェクトの3種類の体験学習において、体験を通して、参加者の異文化に対する態度や国際的志向性、英語学習動機、英語使用不安、コミュニケーションをする意欲などがどのように変化するかを、量的方法、質的方法の両方で調査した。それぞれの体験の成果や意義を異文化間教育と英語教育の観点から考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	510,000	3,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：異文化コミュニケーション・英語教育・海外研修・英語学習動機・文化学習

1. 研究開始当初の背景

日本の各教育機関において、外国語教育（特に英語教育）の一環として、あるいは、異文化理解を促進する目的で、海外研修プログラムが教育活動の一部として取り入れられている。文科省が2002年に提示した「英語が使える日本人」の育成のための活動計画」の中でも、高校生の海外留学者数を増やす計画が明記されている。このような指針を受けて、高

等や大学においては長期・短期の留学など海外交流プログラムに参加する生徒が年々増加傾向にある。また、同活動計画の柱のひとつであるスーパー・イングリッシュ・ハイスクール（平成14年度より指定され、その成果が報告されている）の活動状況をみると、必ず海外交流プログラムや国内の異文化接触プログラム（例：ネイティブ・スピーカーと共に過ごす英語キャンプ、日本に滞在する留学生

との交流)が基幹を成している。

また最近の注目すべき傾向として、海外との交流プログラムが多様化していることがあげられる。たとえば大学生向けの国際ボランティア・プログラム、インターンシップなどワークを中心とした活動が若者の人気を集めている。国際ボランティア・プログラムは、いわゆるホームステイのように、ホスト国の言語や文化を学ぶだけでなく、世界の多くの地域から集まってきた若者たちと協働することにより、異文化学習を進めるというものである。

国際交流プログラムを通して若者が多様な文化に触れ、活動を通して外国語を学ぶ意義は大きいだが、現在のところ、その系統だった評価はあまり行なわれていない。学校が企画し、教員が引率するプログラムでも、内容は業者任せで、教育的に踏み込んだ企画や十分な評価が行われていないのが現状である。多くの大学や高校で、英語力については客観的評価が導入されているものの、海外研修や異文化接触など体験型のプログラムの評価については、既存のテストなどでは測りがたく、評価方法も担当者が模索している状況である。

2. 研究の目的

本研究を通して、英語教育の観点から

(1) 異文化接触や国際的活動を通して英語を实际使用する経験を得ることにより、英語学習に関して(特に学習意欲や学習の意味、情意などについて)どのような変化が観察されるのかを分析する。

(2) 言語テストなど標準化された方法で測りにくい態度・動機(例:英語学習動機、積極的にコミュニケーションを図る態度、不安)など評価方法を提案する。

また異文化間教育の観点から、

(3) 国際的志向性、異文化に対する柔軟な態度などにどのような影響があるのか評価する方法を検討する。

(4) 体験型言語・文化学習を体現する英語学習プログラムを評価する。

3. 研究の方法

(1) 大学生の国際ボランティア・プロジェクト、(2) 大学生の短期語学研修、(3) 高校生による模擬国連プロジェクトの、3種類の体験型言語・文化学習実践を評価するため、以下の方法を用いる。

(1) 国際ボランティア・プロジェクト
<量的分析>プロジェクト参加者 286 人と、対照群 116 人(参加していない学生)を対象に質問紙調査を2度行い、参加の前後で、態度・行動傾向(国際的指向性、エスノセントリズムなど異文化に対する態度、地球市民的傾向、社会的スキル、自己効力感など)英語学習動機、英語でコミュニケーションを図る意思、英語使用不安などがどのように変わるかを分析した。

<質的分析>参加者9人に1時間ほどの半構造化面接を実施し、オープン・コーディング、軸足コーディングを行い、関係する概念を析出した。

(2) 短期語学研修

1ヶ月の研修の間に、カナダにおける短期語学研修に参加した大学生を対象に、記述式(open-ended)の質問紙に回答を依頼した。その内容は、英語の語彙習得のコンテクスト、コミュニケーションの困難状況、英語に対する態度、英語を学習する意味の変化に関するものを含む。それぞれの項目についてオープン・コーディングにより、いくつかの上位概念に分類した。

(3) 模擬国連プロジェクト

模擬国連を中心としたコンテンツ・ベースの英語教育を実施している高校の生徒を対象に、2年半の教育実践の前後に、質問紙調査と英語運用能力テスト (TOEFL) を実施した。質問紙では、英語学習動機、国際的志向性、コミュニケーションを図る意思などについて測定した。また、模擬国連の観察と、生徒によるリフレクションの質的分析も行った。

4. 研究成果

(1) 国際ボランティア・プロジェクト

ボランティアに参加したグループは、すでに参加前の時点で、多くのパラメータにおいて対照群 (非参加者) と有意差があった。以上の点を考慮して、ANCOVA を用いて分析をしたところ、参加を通して、参加を通してさらに参加者と非参加者の間で差が開いた指標が多くみられた。たとえば、参加者はエスノセントリズムが低下し、国際的関心が高まるなど、プロジェクト参加の影響が明らかとなった。また、英語学習動機や、英語でコミュニケーションをする意思など、英語教育関連の側面についても、参加者と対照群とを数量的に比較する解析を行い、彼らが英語学習やコミュニケーションに積極的になったこと、英語を使う際の不安が低下したことなどを示した。

さらに質的研究では、参加者の有志を対象におこなった半構造化面接のオープン・コーディング、軸足コーディングによる分析の結果、体験の内要やプロセス、多文化の若者のコミュニティにおける日本人学生の位置取りなどに関する知見を得ることができた。

(2) 短期語学研修

3年間蓄積したデータの分析を進め、英語

の語彙の習得、英語学習の意味や学習意欲についてどのような意義があるかをまとめている。特に英語の語彙や表現の習得について、他者とのコミュニケーションの場でその使い方を体得し、またそれを別の状況で試してみる様子が報告された。

また一ヶ月のホームステイを通して、英語を使う相手や伝えたい内容の明確化が起こり、その結果、英語を学習する意味が変化していた。今後、英語学習の進め方として、日本において学習できる側面、ホームステイを通して強化される側面を明確化にし、総合的なプログラムを作ることが必要となる。

(3) 模擬国連プロジェクト

模擬国連に参加する高校生を対象に1) 英語運用能力 (TOEFL)、2) 国際的志向性、3) 英語によるコミュニケーションの頻度について、実践の前後に (一年次のはじめと三年次の末) 調査を実施し、その変化を調べた。この変化について、コンテンツ・ベース英語教育の時間数において異なった2種類のプログラムに参加する生徒とスタディ・アブロードに参加した生徒の3グループ間で比較し、体験の中身によって、成果がどのように異なるかを分析した。

その結果、すべての側面においてスタディ・アブロードに参加した生徒の伸び率が顕著であった一方、スタディ・アブロードに参加しなかった2グループでは、コンテンツ・ベースを多く受講した生徒の方が国際的志向性においてやや伸び率が高い傾向にあったが、大きい差は観察できなかった。さらに、スタディ・アブロードに参加しなかった学生をクラスター分析したところ、スタディ・アブロードに参加した生徒と非常に似たプロフィールを示した生徒のグループが浮き彫りになった。

以上のような結果から、スタディ・アブロ

ードが、動機付けや国際志向性を高めるうえで意義があることが認められた。さらに国内においても、「想像の国際コミュニティ」を作り出す実践により、良い結果が得られることが明らかになった。つまり、「想像のコミュニティ」を視覚化することにより、コミュニケーションをする相手の明確化につながり、英語学習動機に良い影響があることが示唆された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

1. Yashima, T. & Zenuk-Nishide, L. The impact of learning contexts on proficiency, attitudes, and L2 communication: Creating an imagined international community. *System*, 36(4). 566-585. (2008). 査読有り

2. 出口朋美・八島智子 2 実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係 『多文化関係学』5 p.33-47. (2008) 査読有り

3. Namura, K. Ikeda, M., & Yashima, T. How can teachers motivate their learners in the classroom? An exploratory study based on the ARCS model. *Language Education & Technology*, 43 p.169-186. (2007). 査読有り

4. 八島智子・安部純子・出口朋美 「異文化理解」の授業を通しておこる学びの質 —教員志望者の実践共同体によるアクション・リサーチの試み— 『LET関西紀要』11 外国語教育メディア学会 p.29-43. (2007). 査読有り

5. 八島智子 異文化接触のクリティカルな瞬間におけるコトバの理解—社会文化論の観点から—竹内理、菊地敦子、名部井敏代、山根 繁、八島智子、住政二郎、池田真生子編 斎藤栄二退職記念論文集 『英語授業実践学の展開』 東京：三省堂 pp. 116-129. (2007). 査読なし

6. Simic, M., Tanaka, T., & Yashima, T. Willingness to Communicate in Japanese as a Third Language among International Students in Japan. *Journal of Multicultural Relations*, 3. p.101-122. (2007). 査読有り

[学会発表] (計 5 件)

1. Yashima, T. *The impact of participation in international work projects on L2 learning motivation, WTC and international posture: Development of the possible L2 self.* The AAAL 2009 Conference. March 21, 2009. Denver, Colorado

2. 八島智子 異文化接触がもたらす態度・行動傾向の変化—国際協働プロジェクト参加者の調査を通して— 多文化関係学会第7回年次大会 東京都日野市 明星大学 2008年10月18日

3. Yashima, T. Development of “English-using ideal selves” through participation in international work projects. The 15th World Congress of Applied Linguistics, August 26, 2008 Essen, Germany.

4. Yashima, T. Autonomy and willingness to communicate: The Development of an English-using Ideal Self. An invited speech at 3rd International Conference of the Independent

Learning Association, 2007. October 6. Kanda University of International Studies, Chiba, Japan

椎名 紀久子 (2008)
千葉大学・国際教育開発センター・教授
研究者番号：40261888

5. 八島智子「第2言語コミュニケーションと感情」2006年度 第5回日本コミュニケーション学会 (CAJ) 関西支部総会・シンポジウム 基調講演 2006年11月11日 千里金蘭大学

〔図書〕(計 2 件)

1. Yashima, T. International Posture and the Ideal L2 Self in the Japanese EFL Context.

In Dörnyei, Z. and Ushioda, E. (eds) *Motivation, language identity and the L2 self*. Clevedon, UK: Multilingual Matters. p. 144-163. (2009).

2. 八島智子・竹内 理 監訳 『外国語教育学のための質問紙入門—作成・実施・データ処理』 (ゾルタン・ドルニエイ著) 東京: 松柏社 p.1-196 (2006).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

八島 智子
関西大学・外国語教育研究
機構・教授
研究者番号：60210233

(2) 研究分担者

田中 共子 (2006-2007)
岡山大学・文学部・教授
研究者番号：40227153

椎名 紀久子 (2006-2007)
千葉大学・国際教育開発センター・教授
研究者番号：40261888

(3) 連携研究者

田中 共子 (2008)
岡山大学・文学部・教授
研究者番号：40227153